

## 心の石を取り除けよ

「ヨハネによる福音書」11章 33～44節を朗読。

39節「イエスは言われた、『石を取りのけなさい』。死んだラザロの姉妹マルタが言った、『主よ、もう臭くなっておりません。四日もたっていますから』。』」

マルタ、マリヤ、ラザロという姉妹と兄弟ですが、イエス様はこの家族とたいへん親しかったことはご存じの通りです。イエス様が彼らから遠く離れた場所におられた時、その兄弟ラザロが病気で死にかかったのです。それで使いの者をやり、イエス様に早く来て祈ってほしいと要請をしたのです。イエス様はその知らせを聞きながらも、すぐにはそこへ行こうとしませんでした。しばらく他の事をしている。弟子たちは知っていましたから、いったい先生は何をしているのか、早く行ったらいいのではないかと。ところが、イエス様は「わが友ラザロは眠っているのだ」とおっしゃる。眠っているのだしたら、起しに行こうという話です。実に、のんきな話をしていたのです。その間に四日位経ったのです。17節に「さて、イエスが行ってごらんになると、ラザロはすでに四日間も墓の中に置かれていた」とあります。ラザロは死んで、四日も経って、その体は墓の中に置かれていた。当時の埋葬は横穴を掘り、そこに遺体を布で巻いて防腐剤を塗り、埋葬するというスタイルです。だから、もう墓の中に納めるわけです。イエス様はやっと彼らのいるベタニヤ村にやって来ます。その時、マルタは早速イエス様を迎えに出て

来ますが、イエス様を愛してやまないマリヤは出て来ません。おそらくイエス様に失望落胆したのではないのでしょうか。あんなに言ったのに来てくれなかった。お姉さんのマルタは少なくとも、礼儀として、イエス様が来られたのだからと迎えに出てきますが、「イエス様、あなたがここにおられたら、兄弟ラザロは死ななかつたのに」と、泣き言を言います。それに対して、イエス様は「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる」と言います。それを聞いたマルタは、確かに世の終りの時、終末の時を迎えるならば、すべてのものがよみがえって、神様の前に集められること、それは知っています。でも、もう今、この世にあつて、死んだ兄弟は二度とよみがえることはなかろうと思っていたのです。そういう失望と落胆の中にいました。しばらくして愛するマリヤもイエス様を迎えに出てくるわけですが、マリヤもまた、マルタと同じような事を言います。32節に「マリヤは、イエスのおられる所に行ってお目にかかり、その足もとにひれ伏して言った、『主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう』。イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、激しく感動し、また心を騒がせ、そして言われた、『彼をどこに置いたのか』。」マリヤさんも、「あなたがここにいて下さったなら、死ななかつたはずなのに、とうとう死んでしまった。これでおしまい」という絶望感、全く希望がない状態になっています。その様子

を見て、イエス様も非常に感動されました。33節にイエス様の姿が語られていますが、実に、私たちと同じように、人間的な感情をもって接しておられる事を知ることができます。「**イエスは彼女が泣き、また彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり**」と、悲しみの中に泣いているのです。その様子を見て、冷たくあしらうではありません。それどころか、イエス様も共に泣いて下さる。「**また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり**」とあります。四日も経っているのですが、まだ悲しい。思いがけない死を体験して、彼らとしては悲しむ以外に方法がなかったのです。その時、イエス様もその様子を見て、大変感動し、「**激しく感動し、また心を騒がせ**」とあります。イエス様の生涯に何度こういう事があったか知りませんが、そんなに多くなかったと思います。それほどにマルタ、マリヤ、その家族をイエス様は愛していたのです。そうであるなら、どうしてもっと早く駆けつけ、知らせを聞いた時にすぐに来られなかったのか。確かに、人間的な感情から言うと、早く行って、慰めてやりたい。また何とか助けになりたいというのが先立つでしょうが、イエス様にとっては、ただ人の情に流されて事を進めるのではなく、イエス様はこの地上に遣わされなされた使命のために、ここに遣わされている。ですから、イエス様の心の中には深い葛藤があったと思います。早く行ってあげたい。しかし、ご自分の使命として、そうすることができない。

では何がイエス様にとっての使命であったのか。それはイエス様が神の子でいらっしゃる事、神ご自身であることを証しすることに他なりません。人としてのイエス様、姿かたちは何ひとつ違いありませんが、神の位に居給うた御子でいらっしゃる方が、あえてこの人の世に降って下さった。それはイエス様を信じる者がまさに永遠の命を持つためです。この命を与えるためです。死んだ人を生かすのも、命を与えることになるではないか。ここではっきりしておくべきことは、イエス様が与えようとする命と、私たちが言うところの肉体的な命とは、全く違うものです。ただ単に肉体的な命を長らえさせるために、イエス様はこの世に来たのではない。その人の肉にある命、物質的な肉にある命は限りがあるものであり、消えていくもの、失われていくものです。それに代わって、イエス様はマルタに言ったように、「**よみがえりであり、命である**」と。イエス様こそがよみがえりであり、命そのものなのです。だから、イエス様に従う。イエス様を信じる。これが命です。そのことを証しするためのラザロの死でもあったのです。しかし、周囲にいる人はそうとは知りません。ただ感情的な、肉にある情愛、親しい間柄である者が亡くなった悲嘆にくれていました。この地上での命が絶たれてしまった。悲しい。単純に言えばその通りです。しかし、人の命、この地上の命は終る時が来る。しかし、それで事は終らない。実は、私たちすべての者は、やがて世の終りの時によみがえらされる。過去、現在、これからも、すべて死んだ人の魂は、

よみがえらされて、神様の前に立ち、さばきを受ける時が来る。そしてその後、イエス様の救いにあずかった私たちは永遠の命の生涯に移されるのだと、これこそが私たちの救いであり、救いの完成です。私たちはこの世にあってイエス様の救いにあずかっていますが、なおこの地上の罪の世に肉体をもって生かされています。しかし、現実はそうであるけれども、もうすでに私たちは神の子として、イエス・キリストを信じる者とされた。イエス・キリストを信じるとは何か。イエス様が私たちの救い主となって、罪もとがもすべての重荷を、イエス様が担って下さった。そしてあの十字架に命を絶たれて下さった。このイエス様こそが私の救い主であり、神ご自身でいらっしゃることを信じる。ですから、この時も、イエス様は感情的に、人間的に言うならば、悲しいことであり、また皆と同じように、これまで元気でいた兄弟がうんともすんとも言わないで、死んでしまったことは、辛いに違いない。だからこそ、イエス様も 35 節に「**イエスは涙を流された**」と。本当に短い一言です。短い一言ですが、イエス様がいかに人として、温かい感情の持ち主であるか。決して冷徹、冷ややかな、無造作に人を立ち切るような、そういうお方ではありません。今でも私たちの思いを知り、そして悲しい時は悲しみ、喜ぶ者と共に喜んで下さる主でいらっしゃる。この時もイエス様は涙を流されます。しかしそれがイエス様の目的ではありません。イエス様は、そこでご自身が命であり、よみがえりである、神でいらっしゃることを証しするのです。

ラザロが死んだことによって、命とは何なのか。それはどこにあるかを、イエス様は彼らに教えようとなさったのです。その時に、37 節、「**しかし、彼らのある人たちは言った、『あの盲人の目をあけたこの人でも、ラザロを死なせないようには、できなかつたのか』。イエスはまた激しく感動して、墓にはいられた**」。「ラザロはどこに置いたのか」。「ここです」と、ラザロを埋葬した墓にイエス様を案内していきます。それらの様子を見ていた周囲の人たちは、「あんなにいろいろな奇跡を起した、目の見えない不自由な人の目を開いて、見えるようにして下さいました。それであるのに、愛するラザロでありながら、死なせないようにはできなかつたのか」と、周囲の声が聞こえてくる。38 節、「**イエスはまた激しく感動して**」、なお一層深い感動をもって、墓にはいって行かれました。「**そこには石がはめてあった**」。もう大きな石で、一人や二人で動くようなものではない。イエス様が埋葬された時もそうです。よみがえった朝、弟子たちが行ってみますと、石が転がされていた。大きな洞穴に、しっかりと石で封をしてしまうのです。それに対して、39 節、「**イエスは言われた、『石を取りのけなさい』**」。「**石を取りのけなさい**」。これを聞いた人たちはびっくりしたと思いますね。おそらく一旦埋葬したら、再び開けることはなかつたのだと思います。教会の納骨堂はいつでも開けられます。簡単ですが、この時はそうはいきません。石を取りのける。一人や二人じゃない。何人かの屈強な男性が集まって、一気に動かさなければ動かせない。手間のかか

ることです。また、人に迷惑もかかることでしょう。だからと言って、どうなるのか。ところが、主は「石を取りのけなさい」と言われる。「死んだラザロの姉妹マルタが言った、『主よ、もう臭くなっております。四日もたっていますから。』」石を取りのけてどうなりますか。もう臭くなっています。四日も経っている。腐敗している。それに対して、イエス様は40節、「イエスは彼女に言われた、『もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか。』」ここで「もし信じるならば」と言われる。何を信じるのでしょうか。それは、イエスは神の子、救い主であることを信じる。言い換えますと、「イエス様、あなたは神です」と信じる。イエス様、あなたは神なるお方です。できないことはありません。

イエス様のところに一人の青年が来て、永遠の命を得るためには何をしたらよいか尋ねました。その時、イエス様は「あなたの持っているものを全部売り払って、貧しい人に施して、そしてわたしに従ってきなさい」と言われました。彼はそれができない。顔を曇らせて去って行ったとあります。その後、イエス様は何とおっしゃったか。弟子たちに対して、「富んでいる者が神の国にはいるのはなんとむずかしいことか」。それを聞いた弟子たちが「いったいそれなら誰が入ることができるだろうか」。その時、イエス様は何と言ったのか。「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」と。人にはできない。私たち人間にできない。それは当然。できないことの多い

人間です。しかし、神様であるなら、できないことはありません。神様を信じること。ここでイエス様を信じる。「もし信じるなら神の栄光を見る」。もしイエス様を神の子と信じるならば、イエス様を神と信じるならば、神の栄光がそこにあらわされる。そうあなたに言ったではないか。この時、まだマルタもマリヤもイエス様の言葉の意味するところが何であるのか、わからなかったと思います。神にはできないことはありません。どうぞ、今日もう一度、私たちの信仰は何を信じることなのか。それはイエス様を信じる。イエス様を信じるとは、イエス様の何を信じるのか。イエス様が神であることを信じる。神ご自身でいらっしゃる。そしてイエス様はできない事のないお方である。神様ですから、イエス様にできないことはないのです。私たちと共にいて下さるイエス様は、よみがえって、世の終りまでいつもあなたがたと共にいる。イエス様は私たちと共にいて、私たちが信じる場所にしがたって、どんな事でもなし得たもうお方です。ですから、ここでイエス様を信じることが何よりも幸いな事であり、またそれが力でもある。だから、イエス様は「もし信じるなら神の栄光を見るであろう」と言われる。

私たちもいろいろな問題の中におかれます。愛する者が死んでしまうというマルタ、マリヤの悲しみのような、あるいはそれ以上の悲しみや失望落胆の中におかれるかもしれません。しかし、そこで何を信じるのか。「ああ、もうだめだ。私にはこんな事はできない。私の手には負

えない。もう諦めるしかない」。いろいろな事で、私たちはそうやってきた。できない、あり得ない、なし得ない。ない、ない、ない。常にそちらの方に心が向いていく。ところが、私たちが今与えられている信仰は、「できない、だからやめておこう」「力がない、だからやめておこう」と、マイナスにいくのではない。ネガティブな方向にいくのではなくて、「主にあってできない事はありません。イエス様、あなたにできないことはない。だから、私はあなたがなし得たもう事を信じます」と、主を信じること、期待していくこと。これがここに言われている神の栄光を見ることです。だから、38 節に、「**イエスはまた激しく感動して、墓にはいられた。それは洞穴であって、そこに石がはめてあった。イエスは言われた、『石を取りのけなさい』。**」石を取りのける。今更取りのけてどうする。イエス様はできない事のないお方。ラザロの姉妹マルタが、「主よ、もう臭くなっております」。「もうできませんよ。今更、見たところで、腐敗もしているし、どうにもなりませんよ」。そのような不信仰な石を取りのける。イエス様を信じる。イエス様が石を取りのけよとおっしゃる。これはできない、無理だよと封をしている石を取りのけて、私にはできません、私にはわかりません、しかし、あなたにはできない事はありません。あなたは必ずなし得たもうお方ですと、主を信じる。それがいつ、どのような形で具体化するのか、それは神様の方がご存知です。私たちがなすべきことは、石を取りのける。不信仰、いわゆるネガティブな封をして、もう動かないも

の、これ以上、だめだと思う。もう一度、その思いを捨てて、すなわち石を取りのける。イエス様がたえず私たちに求められることはこのことです。つい気がつかないうちに、この世の、あれがどうだから、これがどうだからと、こうなったらだめ、あれもだめ、これもだめ、もう無理。時間もない。健康もない。あれもない、これもない。もうやめておこう。あれもしない。これもしない。しょっちゅう私たちはそこに立ちすくんでいる。よみがえりであり、命であるとおっしゃるイエス様は、いつも私たちと共におられる。そのイエス様はなんといわれるか。お前の「だめだ」というその石を取りのけなさい。無理だと思っているその「心の石」を取りのけなさい。あなたはだれを信じているのか。自分を信じている限り無理です。私はできない。それはできません。自分を見れば何にもできない。無能無力であることは重々わかる。だけど、主にはできないことはない。神様、あなたにはできないことはない。あなたはできるお方ですと信じるところに、私たちの信仰がある。だから、ここでイエス様は 39 節に「**イエスは言われた、『石を取りのけなさい』。**」と。私たちはその事をたえず警戒していきたい。気がつかないうちに、サタンは私たちの心を主から離れさせます。「できないよ」「無理だよ」「やめとくべきだよ」「そんなことをしたら、ああなるよ。こうなるよ」。いろいろな事を言ってきます。そうすると、つい私たちは「そうだよ。すればいいけど。そうなければいいけど。ああなければいいけど」。「だったら、したらいい」「い

や、でもできない。私はあれもない、これもない」。でも、「わたしはよみがえりであり、命である」。死をも乗り越えて、生かすことのできる力のある神を私たちは信じているのではないのでしょうか。ですから、「ローマ人への手紙」をお読みしましょう。

「ローマ人への手紙」4章17～31節を朗読。

これはアブラハムの信仰です。17節の後半に、「彼はこの神、すなわち死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである」とあります。私たちの信じる神様はどんな神様でしょうか。イエス様は神なる方、神ご自身でいらっしゃいます。ここに言われるように、死人を生かし、無から有を呼び出す、どんな事でもおできになる方です。その方が私たちと共にいて下さる。私たちの力となり、知恵となり、また私たちに慰めを与え、望みを与え、平安を与えたもう方で、共にいて下さる方が、なお、私たちと共に事を進めて下さる。人生を歩ませて下さる。この地上の日々の生活の、どんな事も神様によらないことは何一つ無いのです。私たちが信じる神様はちっぽけな、どこかの小さな祠に収まるような方ではない。天を造り、地を造り、世界とその中に満ちるものはわがものとおっしゃる神様が、今日も「生きよ」と命を与え、食べる糧を与え、着る物を与え、住むべき場所を備えておられるのではありませんか。そればかりか、これからもまた、この方は私たちの地上の生涯を死に至る

まで握って持ち運んで下さる。そればかりではなく、死んだ後まで、永遠の命の生涯にまで、私たちを導き入れて下さる方です。この時、アブラハムはその事を信じたのです。18節に「彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。そのために、『あなたの子孫はこうなるであろう』といわれているとおりに、多くの国民の父となったのである」。そればかりか、19節に「すなわち、おおよそ百歳となって、彼自身のからだは死んだ状態であり、また、サラの胎が不妊であることを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかった」。認めながらもです。見ないのではない。現実を見て、なるほど、できない。力はない、知恵もない、健康もない、何もない、だけど、神様が何を求めておられるのか。何をしようとしておられるのか。神様のなさることにできないことはありません。神様を信じて、神と共に生きる。つい私たちは現実を見ては、もうこれは無理だよ、この年になって、どうだ、こうだよ。つい私も時に感じ、失望します。力を失います。そのたびに、ここがサタンの思うつぼなのだ。私たちはできないのではなくて、どんなことでもなし得る神様が、今、この私をここに置いて下さっている。それで「わたしの恵みはあなたに対して十分である」と。まずそこに神様は私たちを恵もうとして、持ち運んで下さっている。その方は、どんな事でもなし得たもう方。できない事のない方です。その方に力を現していただく秘訣は何か。心の石を取りのけること。無理よ。できないよ。そう思う思いを取り除いて、主のなさるわざに、一切をゆだねきって

くこと。神様が導かれることがあるのだから、そこに力を尽くし、財を尽くし、空っぽになるほど、そこに従っていけば、必ず神様は応えて下さる。20 節に「彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強められ、栄光を神に帰し、神はその約束されたことを、また成就することができる**と確信した**」。神様は私たちをあがなって、限りない愛をもって愛していると言われる。この約束に従って、今は愛されている私たちです。しかも、力ある方、全能の力をもって万物を支配したもう神様は、私たちのお父さんとなって、私たちをその子供として下さる。この事を私たちはしっかりと信じていきたい。やがて地上の使命が終るならば、必ず神様は私たちを永遠の御国に備えて下さる住まいに移して下さい。これを徹底して信じ続けていく。しかし、現実には常にその信仰を妨げよう、打ち砕こうとする悪の力が常に働きます。それに負けないように、常に心と思いを主に向けて、まず不信仰の石を取りのけて、主にあってできないことはありませんと、常に私はできなくても、主はできます。神様、あなたができるお方ですと信じる信仰に常に立っていきたいと思います。

もう一度、初めに戻ります。ヨハネの 11 章 39 節、「**イエスは言われた、『石を取りのけなさい』。死んだラザロの姉妹マルタが言った、『主よ、もう臭くなっております。四日もたっていますから』。**」まさに、もう臭くなって、四日もたっている。もう無理。そもそも死んでしまった

のですから、だめです。しかし、その不信仰の石をとりわけよと、イエス様はおっしゃる。その時、彼女はどうか。40 節、「**イエスは彼女に言われた、『もし信じるなら神の栄光を見るであろう』。**」もし信じるならです。何を信じるのか。神にはできないことはありません。イエス様、あなたは神です。あなたがして下さいの限り、どんな事でもできます。ここをしっかりと、心においておきたい。その時、41 節、「**人々は石を取りのけた**」。具体的に石を取りのける。それは石ではない。心の不信仰です。「できない。だめだ。いくら神様だって、どんな事をして、無理」と思っているのであれば、それを取りのけて、神にはできないことはありません。「**人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである**」と信じていく。その時、イエス様は何をなさったのか。墓に向かって、「ラザロよ、出てきなさい」。呼びかけた時、ラザロは布にくるまれた埋葬された時のままで出てきた。よみがえりの命がそこに注がれる時、死んだ者を生きる者として下さる。この意味は、じゃあ、死んだ人は誰でも生きるのか。そうではありません。この時、イエス様が「ラザロよ、出てきなさい」と呼ばれてよみがえったラザロは結局死にます。普通に人並みの生涯を終えて、彼は死んだのだと思います。だったら、何の意味もない。ここで一回きり、ラザロをよみがえらせただけではいか。この時、イエス様がラザロをよみがえらせたご目的は、私たちすべての者はやがて死を乗り越えて、新しい永遠の命の生涯に、イエス様によって変えら

れるのだと、具体的に見せて下さった証しです。ラザロがよみがえることによって、ただ単に、死んだ者が肉にあって、肉がよみがえるのではなく、わたしたちすべてのものはもう一度、その死からよみがえり、永遠の命に生きるものへと変えられていくことをイエス様はここで証しされたのです。「神にはなんでもできないことはありません」。どうぞ、今日、もう一度、「石を取りのけなさい」とおっしゃる。ついあれもできない、これは無理、年をとった、お金もない、年金暮らし、いろいろな事で、私どもは不信仰の石をいくつでも積みあげて、だから無理、だからやめておこう、だから失望しやすいのですが、そうではない。主にあってできないことはありません。今日も、こうやって健康を与えられ、神様は私たちに「生きよ」と命を与えて下さる。さらにこれからいつまでかわかりませんが、この肉体の命はやがて消えます。しかし、「わたしはよみがえりであり、命である」とおっしゃる。イエス様が永遠の命の生涯に私どもをよみがえらせて下さる。このことを信じていきたい。そのために、なお地上に在る間、主が与えて下さる様々な課題を、できないのではなくて、主がなし得たもう方、神様がそれを全うして下さいと信じて、まず踏み出して行きたい。そうすると、一歩踏み出せば、神様の方が全面的に後ろから押して下さい。引き上げて下さる。この主を堅く信じていく。そのために、石を取りのけて、主よ、あなたはできないことのない方ですと、確信をもって進ませていただきますように。

ご一緒にお祈りいたしましょう。